

研究ノート 漢代における龍のイメージと神格化

著者	周 正律
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	6
ページ	587-599
発行年	2013-03-27
その他のタイトル	The image and deification of Long (龍) in the Han dynasty (漢代)
URL	http://hdl.handle.net/10112/7638

〔研究ノート〕

漢代における龍のイメージと神格化

周 正 律

The image and deification of Long (龍) in the Han dynasty (漢代)

ZHOU ZhengLv

Long (龍) is considered the symbol of China and the ancestor of Chinese people as well. Known as a god of water and sky, Long also has a great influence to history and the way people think about the world of East Asia. There have already been several studies about the origin of Long since its deification. However the previous researches which refer to reasons and the process of long's deification are not enough. And the character of Long by Han dynasty, as an important reason of its deification, is still unclear.

キーワード：漢代 龍 神格化 画像石

はじめに

東アジアの古代天文学思想を表す壁画である四神と天文図などは、高松塚古墳（藤原京期、約694年～710年）とキトラ古墳（7世紀末～8世紀初頭）から発見された。これは、後の平安時代に盛んだった陰陽道思想の中の天文道と陰陽五行思想の前身と考えられる。その中に、蒼龍（青龍）という東の星宿群から組み上げられた想像上の動物がいる。二つの古墳に描かれている壁画、そして、それらの図像に含まれている情報から見ると、これらの龍や天文図は、中国から朝鮮半島を経由して日本に伝わってきたという可能性がかなり高いと言えるであろう。その龍は中国ではどのようにイメージされているのだろうか。

中国において、最初の龍は恐らくある種の爬虫類への原始崇拝の形であろう。龍は春秋・戦国時代の諸子百家の繁盛を経て、前漢に至ると、戦国時代齊の国の思想家の鄒衍（約前324年～前250年）が提示した陰陽五行思想と天文学に使われ、後漢時期に神仙思想とつながり、神々・仙人たちのお使者、あるいは乗り物となり、仏教・道教の世界観と儒家の王道思想との交渉のうちに、やがて神格化され、王権の守護神とされ、最後には中国人共通の守護神となった。

そのような龍は、後の中国人の性格構成に、多大な影響を与えた。古来、龍の字形・字義の説明によ

って龍の正体を解明しようとした努力は少なくない。近世になると、文化交流はますます国際化し、その刺激をうけたため、龍の正体をめぐっていくつかの新しい説が提出された。しかし、それらの新説は、ほとんど龍の形や漢字からその起源を探るものに過ぎない。中国、ないし東アジア全体まで広がっている龍への崇拜と、その崇拜の原因となる龍の性格については、まだ十分に明らかにされていない。

そこで、本稿は、漢代における龍の神格化と、その原因となる龍の性格を解明する一つの試みである。

一、漢代の崇拜観念と神々

一) 多神教的崇拜観念の確立

白川静氏は『桂東雑記』「中国文化の源流」¹⁾の中で、「神話の時代には、自然は自然神の跳梁する世界であった。時間も空間も、それぞれの神々で充たされていた。」と記している。

中国の場合、神話時代の原始崇拜は、ほとんどある自然現象や現実存在する生き物への畏れに祖先崇拜の要素も加える、というような複合的な信仰を基礎として形成されたものだと思われる。まだ生産力の低い神話時代の集落の統治者たちは、たいてい自分の集落の祖先と神霊の権威を用いて民を支配していた。それがその時代の王道とも言えるだろう。

青銅器の投入による生産力の向上は、集落と祖先の違う人々を一つの国にし、神話時代の王道が次第に通用しないことになってきた。こうして、殷の時代になると、王家は君主の権力、つまり軍事力によって、国々を統一し、他の集落の祖先たちも取り込んで、自分たちが崇拜している祖先と神霊の下に置き、精神世界でも上下の秩序をとまなう統一した世界観を作った。周の時代になると、王家は「天」という古来大地のすべてを覆うと見られている存在に身を委ね、周の王は自ら「天子」つまり天の子供と名乗り、天から万物を支配する権力を与えられたことにし、すべての祖先や神霊の上に立つことになった。言わば、殷・周の時代の王道は、王権と神権の支配を両立したものである。

そういった王道は、周王朝の分裂により、春秋・戦国時代の知識人たちに再検討された。過去の人々はなぜそうした畏れ・崇拜観念を持っていたのかという反省や、今のわれわれはどんな王道を取ればいいのかという考えなど、知識人たちがそれぞれ自分の見解を提出し、著述として遺した。諸子百家の繁盛はまさにその再検討の証拠だと思う。原始的崇拜が古典哲学へと姿を変えはじめたのである。戦国時代の苛烈な抗争、そして、秦の外交政策と武力による統一は、人々に人間の力を見せ示した。今までの王道を反省するときに、はからずも、王権、或いは軍事的力が、次第に神権より表に出てきていた。秦の王は、始皇帝と名乗り、焚書坑儒という手段をとり、王の権力を絶対的優位にし、封建統治を確立した。

そういう状況を承けて成立した漢王朝は、再び崇拜の問題に直面した。そのとき、結論を出したのは、前漢の学者の董仲舒（前179年～前104年）であった。彼は先秦時代の諸子百家の思想を整理し、「天人感應」や、「独尊儒術」などの思想を提出した。王朝の交替は天の自律行為として、皇帝は天命をうけて一般の人々の上に立つ人になった。こういう説によって、巧みに前人の世界観を取り入れ、人間の世界と

1) 『桂東雑記(2)』白川静 東京：平凡社、2003年

神々の世界を見分け、人々の信仰心を王権のコントロール下におくと共に、王の言行に「天」という制限を加えた。そこから、昔からずっと混沌のなかにあった世界認識が、たとえば人間界とと仙人の住む崑崙山という具合に、二つに分かれ、神々が人間から離れ、別の世界でいきいきと存在することになった。同時に、祖先崇拜も、「死後昇天」という形に変化し、漢代にできた神仙思想に取り込まれた。こうして、漢代の中国に、多神教のような崇拜の形式が確立された。

中世の西洋では、キリスト教の統治が主流であり、古い時代の多神教思想が抑えられ、古来の人間性あふれる神々はほとんど「悪魔」とされつつあった。これと違って、漢代に確立された原始崇拜を継続した多神教的な崇拜形式には、古来崇められていたトーテムや、祖先の霊などを取り込み、神とする包容性がある。

以上は、古代中国における龍の神格化の歴史背景による外的要因だと思われる。

二) 神格化における内的要因

日本では、「八百万の神様」といわれるほど、世のあらゆるものに神が宿るとされている。古代中国もほぼ同様である。

ひとつのものが人々に神とされるには、必ず理由がある。つまり、そのものには、神になれる要素が含まれている。祖先の靈魂も、靈獣・靈木も、それは人々の世の中にある現象・物事に対する理解と解釈であり、人間の想像力による物事への解釈には、可能性が溢れている。想像力によれば、物事に対しては、いろいろな解釈の仕方ができる。それに、歴史の進行にも、各種の可能性がある。一つの小さい出来事も、歴史の展開に大きな変化を起こすことが可能である。その変化のパターンを理解しようと、人々は数多くの努力をしてきた。その自分が生きている世界への理解・解釈と、すでに述べた自然の力への畏れと、二つのことが合わせて生み出されたものは「神」である。人間だけが神を持つ。つまり、「神」は人間の内たる可能性と畏れの塊である。そうした可能性と畏れから生み出された神には、強力・無常・無情という三つの性質があると考えられる。強力というのは、神に人間を超えたある種の力が宿っていることである。無常は、変化することであり、つまり、可能性があることである。無情とは、人間の意志と関係なく行動することである。

金烏を例として説明してみよう。古代の中国人は、金色のカラスを太陽の化身としていた。後羿の伝説にも登場した天帝の子供たち、九つの太陽のこともそうである。現実には、カラスは黒くて、腐食性の鳥類であり、よく墓と戦場などのところで行動しているので、人々から恐れられる一面がある。こうしたカラスは、なぜ古代の人々の目に、太陽と同じもののように映っているのか。それは、カラスの習性と関係していると思う。カラスは、夜明けの頃に巣から飛び出し、夕方に巣に戻るという行動パターンで動く。それは、日の昇りと沈みの時間とピッタリあう。そして、人々が太陽を見るには、真昼の太陽はあまりにもまぶしくて、目が焼かれるから、普通は日の出と日の入りの頃の太陽だろうと考えられる。そのとき、同時に目に映る空を飛んでいるカラスは、太陽の光に当たる黒い羽が金色で輝き、太陽と同じように空に浮かんでいる。そのシーンを見た畑から家へ帰る農民も、天体を観測する官人も、酒を飲んでいる詩人も、恐らく金烏ということを目に浮かべたのだろう。こうして、太陽の強い力がもたらした富と災難と、黒いカラスへの畏れをあわせて、金烏という神が生み出されたのだろう。

古代の人々は、よくこうして自然現象と生き物をあわせて神にする。龍も恐らくそういう思考パターンの産物だと思う。

後漢時代の辞書である『説文解字』「卷十一下」〔漢〕許慎撰 清文淵閣四庫全書本〕には龍について

鱗蟲之長。能幽、能明、能細、能巨、能短、能長。春分而登天、秋分而潛淵。从肉、飛之形。童省聲。凡龍之屬皆从龍。

と記されている。

つまり、龍は、ウロコのあるものを統べ、天に昇り、淵に潜る力を持ち、その上、形を自在に変えることができるものだと述べている。それに、『漢書』と『後漢書』の「五行志」の一篇に、「龍蛇孽」という、龍と蛇の行動が引き起こした天災や人間の被害の記録がある。

こうした証拠から見ると、漢代の人々にとって、龍は確かに強力・無常・無情の様な存在である。このような性質は龍が神にされる内的要因だと考えられる。

二、龍と中国の古典哲学の思想

中国の古典哲学は当時の人々の人間が住む世界への素朴な解釈である。世界の構成や、歴史の動向や、社会の秩序から、生物のあり方や、人間であることへの省察まで、近代であれば細かく分類される分野は、あの時代では同じく一つの学問でまとめられていた。

古代の学者たちは、抽象的な物事を具象的に説明するためには、よく龍をメタファーとして引用し、龍の性格のひとつを借りて、相手に自分の言いたいことを理解してもらう。だから、龍の性格の全貌を見るには、そうした引用されている文章の中に点在している龍のイメージをまとめて見なければならない。

本文では、その散在しているものの中の代表的な例を集め、先秦時代から前漢にかけて、定着されつつある龍のイメージの一側面を明らかにしてみたい。

『易経』「乾」の卦には、

乾。元。亨。利。貞。

初九。潜龍。勿用。

九二。見龍在田。利見大人。

(中略)

九五。飛龍在天。利見大人。

上九。亢龍有悔。(後略)²⁾

2) 『周易注疏』〔三国〕王弼注〔晋〕韓康伯注〔唐〕孔穎達疏 清阮刻十三經注疏本

とあるように、龍を引用し、占いの結果を相手に説明している。こうした占いの結果を解釈しようとして、後世の人々は文中の龍について、自分の見解を提示した。

後漢末年の学者王弼（226年～249年）が『易経』を注釈したときにすでに存在し、「乾卦」と「坤卦」の後ろに「文言」という形で残され、孔子の晩年の研究成果とされている『十翼』がある。その中に、

初九曰、「潜龍勿用」、何謂也？子曰、「龍、徳而隠者也。不易乎世、不成乎名、遯世无悶、不見是而无悶。樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔、潜龍也。」

九二曰、「見龍在田、利見大人」、何謂也？子曰、「龍徳而正中者也。庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠、善世而不伐、徳博而化。『易』曰、「『見龍在田、利見大人』」、君徳也。」

九五曰、「飛龍在天、利見大人」。何謂也？子曰、「同聲相應、同氣相求。水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩。本乎天者親上、本乎地者親下、則各從其類也。」

上九曰、「亢龍有悔」、何謂也？子曰、「貴而无位、高而无民、賢人在下位而无輔、是以動而有悔也。」³⁾

というごとくに『易』の原文を解釈し、「乾」の初九・九二に引用された龍は聖人・隠居者の化身とされ、大いなる力の持ち主であるが、自分の身を隠している、というような中庸的な性格で表現されている。また、九五の解釈には、「龍の行動には雲が伴う」と言い、龍の行動は天候へも影響力があるとされている。そして、上九の条には、明らかに天に昇り、最高点に達した「亢龍」が描かれている。

『莊子』「外篇」「天運第十四」（〔戦國〕莊周撰〔晉〕郭象注 四部叢刊景明世徳堂刊本）の中に、

孔子見老聃歸、三日不談。弟子問曰、「夫子見老聃、亦將何規哉？」孔子曰、「吾乃今於是乎見龍。龍合而成體、散而成章、乘乎雲氣而養乎陰陽。予口張而不能嚼、予又何規老聃哉。」子貢曰、「然則人固有尸居而龍見、雷聲而淵默、發動如天地者乎？賜亦可得而觀乎？」遂以孔子聲見老聃。

とあるように、老子を龍に譬え、変化無常の思想・大いなる徳として記している。そこに見える龍は、自在に姿を変えて天を駆け、淵の底に潜って、人々に姿を示さなく咆え声だけを聞かせるというイメージである。

また、「乘乎雲氣而養乎陰陽」から見ると、龍は陰陽、つまり世界の理にも合うと言っている。前漢の礼学者の戴徳（生没年不詳）は『大戴礼記』「卷第五」（〔漢〕戴徳撰 四部叢刊景明袁氏嘉趣堂本）に、

毛蟲之精者曰麟、羽蟲之精者曰鳳、介蟲之精者曰龜、鱗蟲之精者曰龍、倮蟲之精者曰聖人。龍非風不拳、龜非火不兆、此皆陰陽之際也。

と記し、つまり、龍は風の力によって天に昇り、これは万物の行動がすべて陰陽（世の理）に合う証拠だと言っている。

3) 同上

また、董仲舒は自分の著作『春秋繁露』「乞雨」に、雨乞いの儀式を行い、法陣を作るときには、「龍」が必要だと記した。

後漢以前の龍のイメージを考証し、その集大成とも言える文章は、後漢初期の儒者・無神論者の王充(27年～約47年)の『論衡』「龍虚」だと思われる。その中に、

盛夏之時，雷電擊折破樹木，發壞室屋，俗謂天取龍。謂龍藏於樹木之中，匿於屋室之間也，雷電擊折樹木，發壞屋室，則龍見於外，龍見，雷取以升天。世無愚智賢不肖，皆謂之然。如考實之，虛妄言也。

夫天之取龍，何意邪？如以龍神為天使，猶賢臣為君使也，反報有時，無為取也。如以龍遁逃不還，非神之行，天亦無用為也。如龍之性當在天，在天上者，固當生子，無為復在地。如龍有升降，降龍生子於地，子長大，天取之，則世名雷電為天怒，取龍之子，無為怒也。

且龍之所居，常在水澤之中，不在木中屋間。(中略)在淵水之中，則魚鱉之類，魚鱉之類，何為上天？天之取龍，何用為哉？

如以天神乘龍而行，神恍惚無形，出入無間，無為乘龍也。如仙人騎龍，天為仙者取龍，則仙人含天精氣，形輕飛騰，若鴻鵠之狀，無為騎龍也。世稱黃帝騎龍升天，此言蓋虛，猶今謂天取龍也。

且世謂龍升天者，必謂神龍。不神，不升天；升天，神之效也。(中略)天有倉龍、白虎、朱鳥、玄武之象也，地亦有龍、虎、鳥、龜之物。四星之精，降生四獸，虎鳥與龜不神，龍何故獨神也？

人為保蟲之長，龍為鱗蟲之長，俱為物長，謂龍升天，人復升天乎？龍與人同，獨謂能升天者，謂龍神也。世或謂聖人神而先知，猶謂神龍能升天也。因謂聖人先知之明，論龍之才，謂龍升天，故其宜也。(中略)短書言：「龍無尺木，無以升天。」又曰「升天」，又言「尺木」，謂龍從木中升天也。彼短書之家，世俗之人也，見雷電發時，龍隨而起，當雷電樹木擊之時，龍適與雷電俱在樹木之側，雷電去，龍隨而上，故謂從樹木之中升天也。

實者，雷龍同類，感氣相致，故《易》曰：「雲從龍，風從虎。」又言：「虎嘯谷風至，龍興景雲起。」龍與雲相招，虎與風相致，故董仲舒雩祭之法，設土龍以為感也。夫盛夏太陽用事，雲雨干之。太陽，火也，雲雨，水也，火激薄則鳴而為雷。龍聞雷聲則起，起而雲至；雲至而龍乘之。雲雨感龍，龍亦起雲而升天。天極雷高，雲消復降。人見其乘雲，則謂「升天」；見天為雷電，則為「天取龍」。世儒讀《易》文，見《傳》言，皆知龍者、雲之類。拘俗人之議，不能通其說；又見短書為證，故遂謂「天取龍」。

天不取龍，龍不升天。(中略)見龍乘雲，獨謂之神，失龍之實，誣龍之能也。

然則龍之所以為神者，以能屈伸其體，存亡其形。屈伸其體，存亡其形，未足以為神也。(後略)⁴⁾

とあるように、前代の古典哲学の思想と前漢の著作を引用して、龍と自然現象(主に雷と雲)の関係と、それを「龍の昇天」という風に認識した人々の考え、また、そこから生まれた世俗の「天取龍」という解釈などを説明した。その上、彼は古代における「龍之所居、常在水澤之中」という龍の水棲のイメー

4) 『論衡』「卷第六」〔漢〕王充撰 四部叢刊景通津草堂本

ジによって、「天取龍」の原因は「神が龍を乗り物としている」という当時の龍のイメージの不合理性を説明し、それと四神の中に龍だけが神にされたという事実をあわせて、龍は「昇天」ではなく、雲に乗って移動しているだけだと言った。最後に王充は、龍の神にされた原因が、体を自在に変化させることにあると提示し、しかし、このようなことができるといっても、神である証拠とはならないと指摘した。

こうして、彼は龍の正体と神格化された原因を論述し、本当の龍は昇天することができなく、神ではないという風に、世にある一般の考え方に反撥している。

王充の文章から見ると、前漢までに、世俗における龍のイメージは、「普通の獣の一種」・「自在に変化でき、昇天できる霊獣」・「大いなる力・徳の化身」・「星宿群である四象の一つ」・「神々の乗り物」・「水の神」・「木の神」・「雷の神」などがあり、固定されたイメージはまだ形成されていない状態だと見られるが、龍がすでに神格化されたことは確実である。だから、王充は龍の存在について論述する必要があると判断し、そうした文章を書いたと考えられる。

次に、このような龍の様々なイメージに対して、後漢時期の墓にある画像石めぐって、その上に描かれている龍の姿を挙げ、漢代の人々の認識における龍の効能・効用について検討を加えたい。

三、図像資料から見る龍の効能・効用

これまで発見された後漢時期の墓の中には、龍の姿を描いた画像石が見られる。それらはだいたい墓室の石壁、入口の門柱、地上の祠に、もしくは石棺の四面に刻まれている。

そのほか、[図1]と[図2]のように、「瓦當」という、屋上の周縁に設置され、瓦の落下を防止し、建物の装飾でもあるものにも、四神の一つとして刻まれた龍が見られる。それは、古代中国の天文学に基づいて作られたものだと考えられる。

しかし、こうした建物、墓の門柱、祠などに飾られている龍は、すでに天文学における星宿群である青龍（図3参照）と違い、墓の守護神として、「鎮守」という、邪悪を鎮圧し、墓と宮殿の主人を守る効能・効用があると思われる。

古代中国の天文学によると、華北平原の上の空には二十八宿（図4参照）があり、そのうちの東方七



図1 漢青龍瓦當拓本⁵⁾

5) 台湾國立歷史博物館藏 (http://content.teldap.tw/main/dc_detail.php?dc_id=2389661)

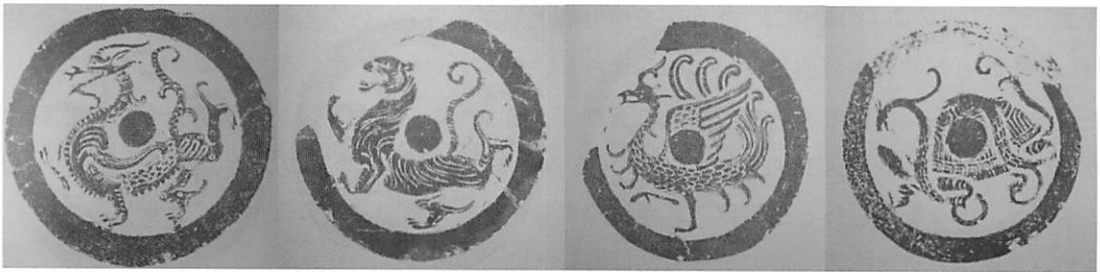


図2 漢四神瓦當⁶⁾



図3 河南省南陽 漢代画像石⁷⁾

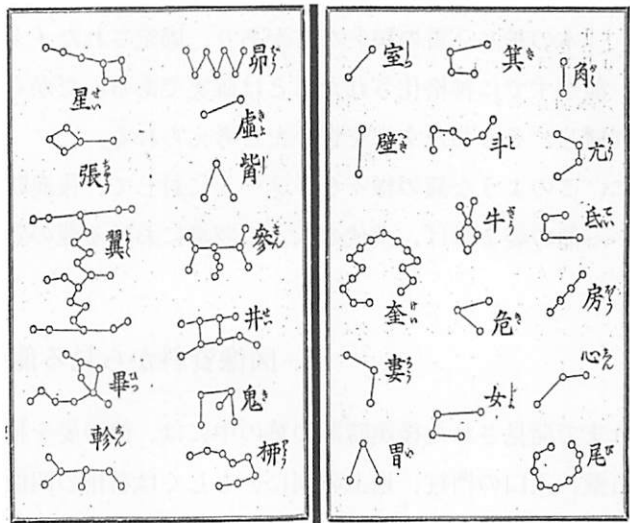


図4 二十八宿図⁸⁾

宿（角宿・亢宿・氐宿・房宿・心宿・尾宿・箕宿）をつなぐと龍の姿に見える。また、陰陽五行説によると、青色は東方の色である。そのため、その星宿群のことを青龍（蒼龍）と呼び、後に東方の守護神とされている。

上代の伝説によると、龍はいつも淵に棲息しており、水の力を操縦でき、水族の長とされている。それを引き継いで、董仲舒は『春秋繁露』「卷十六」「求雨第七十四」(〔漢〕董仲舒撰 清武英殿聚珍版叢書本)の中に、

春旱求雨、令縣邑以水日、令民禱社家祀、戶無伐名木、無斬山林暴、巫聚蛇八日、于邑東門之外為四通之壇、方八尺、植蒼繪八。其神共工、祭之以生魚、八元酒、具清酒膊脯。擇巫之清潔辯言利辭者以祝、祝齋三日、服蒼衣、先再拜、乃跪陳、陳已、復再拜、乃起、祝曰、昊天生五穀以養人、金五穀病旱、恐不成敬。進清酒膊脯、再拜請雨、雨幸大澍、奉犧牲禱。以甲乙日為大蒼龍一、長八丈、居中央、為小龍七、各長四丈於東、方皆東向、其間相去八尺。小童八人、皆齋三日、服青衣而舞之、

6) 《中国古代瓦当图典》赵力光 编 文物出版社, 1998年

7) 『図説 龍とドラゴンの世界』笹間良彦 遊子間, 2008年

8) 『安部晴明籠篋内傳圖解』東京神誠館, 1912年

（後略）。

夏求雨、（中略）、以丙丁日為大赤龍一、長七丈、（後略）。夏季禱山陵以助之、（中略）、以戊巳日為大黃龍一、長五丈、（後略）。

秋、（中略）、以庚辛日為大白龍一、長九丈、（後略）。

冬、（中略）、以壬癸日為大黒龍一、長六丈、（後略）。

とあるように、四季それぞれ色違いの龍を用いて、雨乞いの儀式を行われるべきだと記している。つまり、龍は雨乞いの儀式の陣の特定な方向に設置され、天との交渉の媒介として使われることが見える。それを先決条件にして、また身だしなみの「清潔」で、交渉することが得意な「巫」に頼んで、天に雨を降らせるよう請願する。

龍はここで、一種の神との交渉の道具・媒介、或いは「犠牲」として使われているかもしれない。それは、龍にある水の靈獣と昇天する神の使者との二つの性格を複合的に見られているということであろう。

それに、龍は生きている人々のために使われただけではなく、死後昇天するときにも、その姿が見られる。戦国時代を始め、神仙思想は漢代で盛んになった。『漢武帝内伝』、『列仙伝』、『神異経』などは、すでに後世の人が漢代の有名人の名を借りて書いたものだと明らかにされている。しかし、その中に漢代の仙人と仙界の交通手段を描くときに、同じく龍の引く雲車（図5参照）を持ち出した。それは、後世の人々が漢の時代の神仙思想と仙界への想像を引き継いだ証拠だと考えられる。

その雲車が仙界の交通道具だという考え方には、先秦時代にすでに完成された『山海経』の影響がかなり大きいものと思われる。『山海経傳』（〔晉〕郭璞編 四部叢刊景明成化本）の中には、

海外西經第七 南方祝融、獸身人面、乘兩龍。

海外西經第七 西方蓐收、左耳有蛇、乘兩龍。

海外南經第十 東方句芒、鳥身人面、乘兩龍。



図5 四川省彭州市 漢墓 壁画⁹⁾



図6 湖南省長沙市 子弹库楚墓（戦国）帛画¹⁰⁾

海外東經第九 北方禺彊、人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩青蛇。

と記しているように、龍と蛇が区別され、南・西・東の神は二匹の龍を乗り、北の神は蛇を足で踏んでいる。龍はそこから、すでに四方における一番力の強い神の乗り物とされている。そのような考え方は、戦国時代に下っても、まだ残されている。

『楚辞』の中の「九歌」という歌集には、

『雲中君』 「龍駕兮帝服、聊翱遊兮周章。」

『湘君』 「駕飛龍兮北徵征、適吾道兮洞庭。」

『大司命』 「乘龍兮鱗鱗、高駝兮冲天。」

『東君』 「駕龍輶兮乘雷、載雲旗兮委蛇。」

『河伯』 「乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮驂螭。登崑崙兮四望、心飛揚兮浩蕩。」¹¹⁾

とあるように、すべての神々は龍に乗っている。(図6参照) 逆に言うと、龍という乗り物を持つことは神である象徴だといっても過言はないだろう。また、同じ『楚辞』に編集されている「離騷経」には、

「為余駕飛龍兮、雜瑤象以為車。」

「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇。」¹²⁾

9) 『中国漢代の画像と画像墓』「資料編」羅二虎著 渡辺武訳 慶友社、2002年

10) 新华网・湖北 (http://www.hb.xinhuanet.com/cwh/2005-03/04/content_3817748_12.htm)

11) 『楚辞』〔漢〕王逸章句〔宋〕洪興祖補注 四部叢刊景明翻宋本

12) 同上

とある。それは、人間としての作者の屈原の自分が龍に乗っているという想像である。

そういった『山海経』と『楚辞』のような伝説と、広く使われてきた馬車と結合して、漢代の龍に引かれる雲車が生み出されたと思われる。

前述の資料によると、漢代の人々の考えにおいて、龍には、墓室・建物の守護神、天界の交通道具・死後昇天するときの引導者、雨乞いのときに神と交流するための媒介などの効能・効用がある。

四、龍のイメージ

世界的に見れば、蛇信仰は珍しくはない。いわゆる大地母神への信仰は、農耕牧畜文明なら、かなり普遍的なものだと思われる。しかし、姿がはっきりしている中国最初の龍の形（図7参照）の時代から、約4000年をかけて、龍のイメージはようやく漢の時代に初歩的な定着をみた。前述のように、西洋とはまったく違う崇拜観念から生み出された中国の龍は、他の蛇信仰と比べると、かなり異質なものだと思う。

また、『爾雅翼』「卷二十八」「釋魚一」の龍の条（〔宋〕羅願撰 清文淵閣四庫全書本）には、

龍、春分而登天、秋分而潛淵。物之至靈者也。淮南子言、萬物羽毛鱗介皆祖於龍。（中略）王符稱、世俗畫龍之狀馬首蛇尾、又有三停九似之說、謂自首至膊、膊至腰、腰至尾皆相停也。九似者、角似鹿、頭似駝、眼似鬼、項似蛇、腹似蟹、鱗似魚、爪似鷹、掌似虎、耳似牛。頭上有物如博山、名尺木、龍無尺木不能升天。（中略）古者有豢龍御龍氏徒、以知其欲惡而節制之耳。將雨則吟、其聲如憂銅盤、涎能發衆香、其噓氣成雲、反因雲以蔽其身、故不可見。今江湖間時有見其一爪與尾者、唯頭不可得見。自夏四月之後龍乃分方、各有區域、故兩畝之間而兩鳴異焉。又多暴雨說者、云細潤者、天雨猛暴者龍雨也。龍火與人火相反、得濕而焰、遇水而燔、以火逐之則燔熄而焰滅。（中略）故在人比君、在卦比乾之七爻、象天蒼龍七宿、乾七爻以龍為用天、七宿以龍為體、盖自下數之其第一爻潛



図7 遼寧省 紅山文化遺跡（約前4000年）玉龍¹³⁾

龍則未見也。(中略) 今易讀亢龍與角亢之字異音、然其義實相通、蓋順則降、升則逆、龍之亢有逆鱗一尺、而不可膺也、則為能升而不及反、故曰亢龍有悔、然則乾之亢龍雖以角亢之亢讀之可也。

とある。『爾雅翼』は宋の時代の書物で、その時代の龍には、降雨の命を司る龍王や、のどの下に逆鱗があるなど、仏教と道教の影響や、漢代以後の人々の想像などもかなり加わっていた。しかし、文中に漢代の学者の王符の言葉と『淮南子』の中の言葉が引用されている。それによると、龍は万物の始祖で、龍を描くときには、馬の頭と蛇の尻尾が参考になる。他に、龍の形は「九似」という特徴があり、体の各部分は九つの他の動物に似ている。また、龍と、『易経』「乾卦」と古代天文学の関係も提示した。確かに龍のくねくねしている体が蛇を連想させるが、やはり他の部分はとても蛇信仰とは一概しがたく、中国の独自の文化要素として取り上げる方がよいと言える。

総じて、古典哲学の著作に引用された龍と、今まで発見された画像石に現われた龍をあわせてみると、漢代の龍は、水族の長、雨乞いの媒介、自在に体を変化させる靈獣、四神の一つ（東方の代表）、墓、建物（主に王宮に使われる）の守護神、神々の乗り物、死後昇天の引導者などのイメージの複合体である。画像石に刻まれた龍の姿の検討を踏まえて、便宜上、大きく分けて「水龍」と「天龍」で名づけよう。そして、水龍から天龍へ、昇天という動作によって形の変化することが可能であり、また、記録はないが、逆方向の変化も可能だと考えられる。その龍の二つの姿を表現するとき、水龍であれば、そのそばには、目印として、必ず魚が描かれている。(図8参照) それに対して、天龍を描く場合には、龍の肩に



図8 四川省樂山市 鞍山崖墓（後漢）石棺外壁¹⁴⁾



図10 四川省 彭州市、新都県などの地（後漢）画像石¹⁶⁾



図9 四川省合川市 石墓（後漢）墓室の門柱¹⁵⁾

翼を添付し、或いは、虎とセットにして、西王母の背後に置く。(図9、図10参照) 逆に言うと、現在わ

13) 考古中国 (<http://www.kgzg.cn/forum.php?mod=viewthread&tid=6070>)

れわれが認識している龍のイメージとは若干の違いがあり、ただくねくねしている龍を一匹だけ描いたら、漢代の人々は当分、それを別の獣として理解してしまうかもしれない。

おわりに

龍は中国の人々に民族と国家の象徴とされている。近代の学者たちも、各分野において龍の起源をめぐる研究を行った。それらの研究は、すでに神格化された龍の存在と龍の性格を前提にしている。しかし龍はなぜ、かつどのように神格化されたという問題についての検討はまだ不十分であった。

本稿は龍が神格化された外的要因である多神教的な崇拜観念の成立と、その内的要因である龍の原始崇拝的な性質を説明することによって、龍の神格化の歴史と思想的基礎を明らかにすることを試みた。また、中国の古典哲学の中に用いられた龍のイメージと、漢代の画像石に描かれた龍の姿からみると、龍は漢代に神格化されたということは明らかである。古典哲学の中の龍と漢代の画像石の龍を見比べてみると、漢代の人々は、龍を墓室・建物の守護神、仙界の交通道具（昇天できる）、水を司る神として認識していたと考えられる。そのイメージは水龍と天龍という二つに定着しているようである。

以上、漢代において、多神教的な崇拜観念の確立という外的要因と、原始的崇拝時期における龍の強力・無常・無情の基礎的性質という内的要因との作用で、龍は爬虫類の一種から、水族の長、天文学における星宿群の四象の一つ、王宮・墓の守護者、神々の乗り物・死者を天界へ導く者、というような人々の解釈の発展ルートを踏みながら、最後に水龍と天龍という、大きく二通りのイメージに帰結し、神格化されていったと考えられる。

14) 『中国漢代の画像と画像墓』「資料編」羅二虎著 渡辺武訳 慶友社、2002年

15) 同上

16) 同上